

2024 年 7 月 23 日

報道関係者各位

内閣官房領土・主権対策企画調整室

竹島で明治時代にアシカの捕獲が行われたことを示すこれまでより古い資料の領土・主権展示館の夏のイベントでの展示について

領土・主権展示館が開催する夏のイベント（7月23日～9月1日）において、最近研究者が確認した竹島のニホンアシカに関する1902（明治35）年の新聞記事（見世物小屋からのニホンアシカの逃走騒ぎ）を初めて紹介します（別添1）。これまでに知られている明治時代の竹島のアシカ猟の最古の公的記録は1903（明治36）年のものですが、この新聞記事は、それよりも古い時期に竹島でアシカの捕獲が行われたことを示す資料です。またこの記事は捕獲された直後に書かれたものであることから、後年に伝聞などに基づいて書かれた資料よりも事実関係に高い信頼性があると考えられます。

【休館日】月曜日、ただし、8月12日（月・祝）は開館。翌8月13日（火）休館。

所蔵：（新聞記事）：国立国会図書館

作成（アシカの親子のイラスト）：井上貴央鳥取大学名誉教授

「領土・主権展示館」及び夏のイベントについて

「領土・主権展示館」は、北方領土・竹島及び尖閣諸島など我が国の領土・主権に関する歴史的資料などをまとめて紹介する国立の展示施設です。同館では、年2～3回程度、企画展や家族向けの夏のイベントを実施しており、今年の夏は、7月23日（火）～9月1日（日）にかけて、『夏休みまるごとキッズフェスティバル』と題し、こども向け・家族向けのイベントを開催します。

また、イベントに併せて、北方領土・竹島・尖閣諸島に焦点を当てた動物特集のミニ企画展『どうぶつウォッチング！～北方四島・竹島・尖閣諸島のなかまたち～』を同時開催します。竹島に関しては、1975（昭和50）年以降目撃情報がないとされるニホンアシカを紹介するパネル展示を行います。このパネル展示では、韓国による竹島の不法占拠後もニホンアシカが生息していたことを記した韓国側の文書も紹介します。

ミニ企画展に併せて、ニホンアシカに関する専門家である井上貴央鳥取大学名誉教授による講演会を8月9日（金）に開催します（別添2）。

今回初めて公開する資料について

今回のミニ企画展に際して、最近確認された1902（明治35）年3月3日付『京都日出新聞』の新聞記事を初めて紹介します。この記事は、同年2月15日に「リヤンコ島」（現在の竹島）で捕獲された大きさ七尺（約2m10cm）あまりのニホンアシカが京都の新京極で供覧されたが、二度にわたって逃げ出して大騒ぎになったという新聞記事です（別添1：記事の画像と全文の翻刻）。記事には、逃げ出したニホンアシカとそれを取りまいて動揺する人々をコミカルに描いた挿絵（木版画）が掲載されています（下の画像）。



所蔵：国立国会図書館

これまでに確認されている明治時代の竹島でのアシカ猟の最も古い公的記録は、島根県公文書センターが所蔵する行政文書の綴り『竹島貸下海驢漁業』に記載された明治36（1903）年のアシカ猟の記録です。今回の新聞記事は、さらにそれより前に竹島でアシカの捕獲が行われたことを示す資料となります（※1）（※2）（※3）。

韓国は、日本が侵略的な意図をもって韓国の領土であった竹島を奪ったなどと独自の主張をしています。しかし、竹島は島根県に編入される（1905 年）以前に、韓国の領土であった事実はなく、同島の島根県への編入は同島での日本人による経済活動を契機となったものでした。今回の新聞記事は、そのような経済活動がこれまでに見つかった公的記録よりさらに遡ることを示すものとして重要です。

また、昭和期になると隠岐の人々が竹島のアシカを生け捕りにして動物園やサーカスに販売したことが知られていますが、明治時代のこの時期にすでにそのような実例があったことを示すものです。

20 世紀初頭、竹島の島根県編入の契機となった中井養三郎の「リヤンコ島領土編入并貸下願」（1904 年）の件名にもみられるとおり、竹島は「リヤンコ島」と漁業者などから呼ばれておりました。1905 年の同島の島根県編入を機に「竹島」と命名されます。19 世紀終盤の新聞記事にも「リランコ島」といった類似の名称が用いられているものがありますが、「リヤンコ島」という名称が確認できる新聞記事としては、最も古いものになります

なお、同記事ではこのアシカを捕獲したのは、「東京洋魚組合水産技師の遠藤達造氏」と報じられていますが、現時点ではこの人物がいかなる人物であるかは判明しておらず、今後の研究課題となっています。

（※１） 後年の書物や口述記録などでさらにそれ以前から竹島で事業を行っていたことを示唆する記録は多く存在しますが、この新聞記事は、竹島のアシカの捕獲が行われた直後に書かれたものであり、後年に伝聞などによって書かれた資料よりも事実関係に高い信頼性があると考えられます。

（※２） この『京都日出新聞』1902 年 3 月 3 日付の記事は、樋口保美氏のブログ『見世物興行年表』（http://blog.livedoor.jp/misemono/archives/cat_50048127.html）において各種興行に関する新聞記事の一つとして紹介されていたものです。井上貴央鳥取大学名誉教授が、同記事の中に、竹島の旧名である「リヤンコ島」及びアシカの漢名の一つである「海獺」があることに着目。藤井賢二島根県竹島問題研究顧問とともに実際の記事を確認し、木版画の絵などから、この「海獺」がニホンアシカであると特定されたものです。

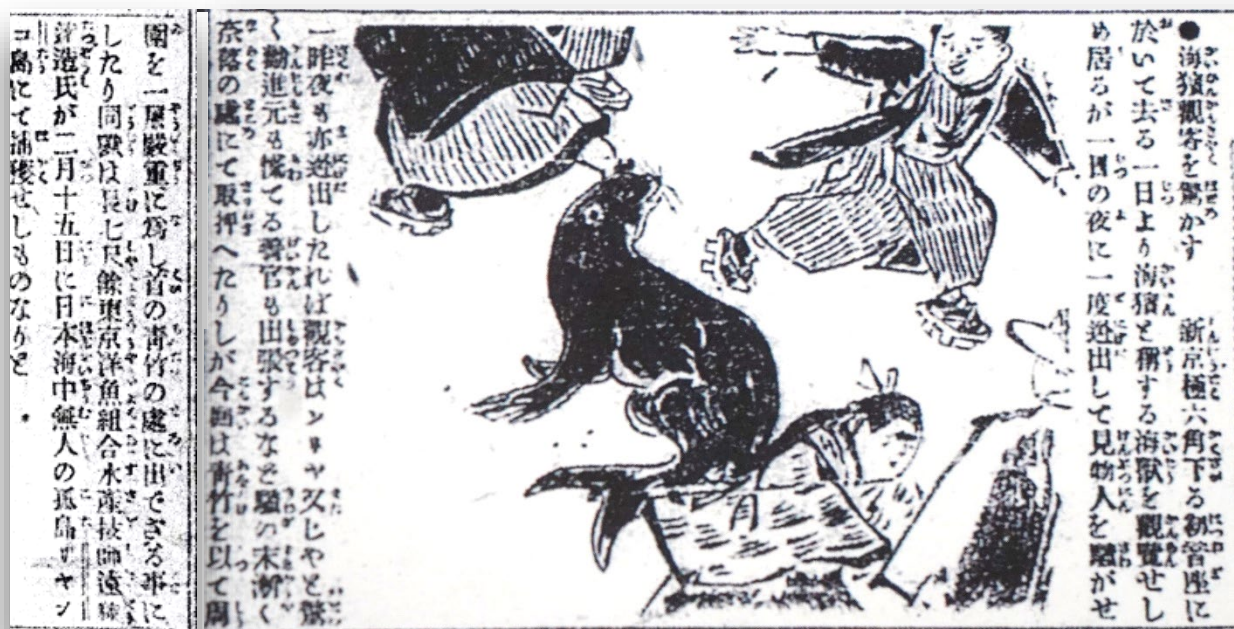
（※３） 17 世紀、米子の大谷家と村川家は、幕府の許可を得て鬱陵島においてアシカの捕獲やアワビの漁獲、材木の入手といった事業を実施しました。両家は、鬱陵島までの航路の途中にある現在の竹島を航路目標や途中の停泊地とするとともに、アシカの捕獲やアワビ漁獲の好地として利用しました。

（別添１）新聞記事の画像と翻刻

（別添２）井上貴央鳥取大学名誉教授の講演会チラシ（８月９日）

新聞記事の画像と翻刻

『京都日出新聞』 1902（明治）年 3 月 3 日付記事



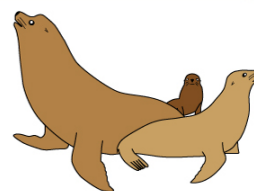
所蔵：国立国会図書館

翻刻

●海獺観客を驚かす 新京極六角下る初音座において去る一日より海獺と称する海獣を観覧せしめ居るが、一日の夜に一度逃出して見物人を騒がせ、一昨夜もまた逃出したれば観客はソリヤ又じやと驚く、勧進元も慌てる、警官も出張するなど騒（さわぎ）の末、漸く（ようやく）奈落の処にて取押へたりしが、今回は青竹を以て（もって）周囲を一層嚴重に為（な）し、首の青竹の処に出でざる事にしたり。同獣は長七尺余、東京洋魚組合水産技師遠藤達造氏が二月十五日に日本海中無人の孤島リヤンコ島にて捕獲せしものなりと

※ 読みやすくするため、一部の文字（「獺」）以外は、旧字体を含む常用漢字以外の漢字を常用漢字又はひらがなに修正しています。

特別講演会

ひげき かいじゅう
悲劇の海獣

ニホンアシカを追って

かつて日本各地にニホンアシカが生息していました。古くは古事記の神話に登場し、今でも山陰地方や出雲大社にその古い呼称が残っています。縄文・弥生遺跡からは骨が出土し、高松藩などでは鉄砲による狩りの記録が残っています。竹島では、江戸時代から狩猟が行われ、明治時代には皮を目的に大量捕獲されました。昭和に入ると生け捕りにされて動物園の人気者になりました。戦後も竹島ではアシカが確認されていましたが、今では姿を見なくなりました。まさに悲劇の海獣と呼ぶにふさわしい動物です。明治時代に日本の動物学は大きな発展をとげましたが、ニホンアシカは研究されることなく姿を消しました。島根大学のはく製標本や竹島の8ミリフィルムの発見をきっかけに、ニホンアシカを追って研究をしてきた井上先生にこの悲劇の海獣についてお話しいたします。

●先生の紹介

いの うえ たか お
井上 貴央 先生（鳥取大学名誉教授）

略歴

1978年鳥取大学医学部医学科卒業。医学博士。同大学助手・講師・助教授を経て、1991年教授に就任し医学部長などを兼任。ヒトを含めた動物の細胞や骨などの形を調べる形態学が専門で、電子顕微鏡によるミクロの研究から目で見えるマクロの研究まで幅広く“かたち”の研究を行う。ニホンアシカ剥製標本の国内初の確認や竹島映像フィルムの発見を機会に、ニホンアシカの研究に取り組む。人体骨格のペーパークラフト・ブック『ボニー』、『鳥取発! 青谷の遺跡の骨物語』をはじめ、『カラー人体解剖学』、『生命ふしぎ図鑑 脳のしくみ—4億年の歴史を探る—』などの著作がある。

開催日

2024年8月9日(金) 17:00-18:10

(講演50分、質問20分)

会場・共催

公益財団法人 日本国際問題研究所

東京都千代田区霞が関3-8-1 虎ノ門ダイビルイースト3階(領土・主権展示館 同ビル内)

定員

先着30名(事前申込み制・入場無料)

参加申込み方法

参加希望者全員の氏名・電話番号を明記のうえ、

info@mtas.go.jp までメールにより送付。

※zoomによるオンライン参加も可能です。詳細・申込み方法はHPをご覧ください。
https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/tenjikan



お問い合わせ先

領土・主権展示館 03-6257-3715

〔所在地〕東京都千代田区霞が関3-8-1 虎ノ門ダイビルイースト1階

イベントの内容が変更・中止となる場合がございます。お出かけ前にHP等をご確認ください。

表裏のアシカのイラスト:井上貴央鳥取大学名誉教授が作成

領土・主権展示館
NATIONAL MUSEUM OF
TERRITORY AND SOVEREIGNTY